

## ～ セピア色の風景 ～

## 「囲炉裏」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

昔は、煮炊きであれ暖房であれ、薪を燃やす囲炉裏が居間の中心にあった。燃える炎の上には自在鉤にかかった鉄瓶が、四角の枠に囲まれた灰には火箸と先がギザギザとなった灰かき（灰ならし）がささっており、隅には消し壺が埋めてあった。

この消し壺には、囲炉裏で燃えた薪からできた熾（おき）が入れられ、貴重な消し炭が作られていた。

また当然、囲炉裏の熾で餅を焼いたのだが当時、火を囲むように便利な形をした半円状の渡し金もあった。夕方、そこで焼いた餅を冷めないように懐に入れ、家の近くの田畑で働いていた家族のもとに青田少年は走るのであった。

囲炉裏の煙はどのように戸外に出していたか。居間全体

がいわば煙突であり、囲炉裏から出た煙はそのまま屋根裏まで上り、そこから煙出し（けむだし）屋根につくられた格子から、外に出たのである。この煙出し屋根は、大きな母屋の屋根の上にちよこんと載った小屋根で、二段になった屋根の間の格子は常に開いていたわけだから、居間には常時外気が入っていた。

外気どころか、秋の風の強い日には枯れ葉も入り込み、真っ黒に煤（すす）けた屋根裏からひらひらと居間に舞い降りてきた。そんな夜は風が入り込み、囲炉裏の煙も真っすぐ上がらず、居間中に漂い目にしみるので、青田少年はさっさと裸電球下の小便臭い寝床にすべり込むのであった。

煙といえは、もう一つ風呂小屋（場）の煙である。わが

家は隠居屋と併設であったが、火災による母屋の焼失を恐れて、通常風呂小屋は単独で、母屋から少し離れ庭の隅のほうにぼつんと建っていた。それだけ風呂焚き（わが家では風呂燃やしといっていたが）仕事は注意が必要なものだったため、火を扱える大きな子ども仕事になっていた。そのため青田少年は、その仕事を任せられるようになったときは、遊びたくて面倒だと思ふ反面、少し誇らしげでもあった。

その風呂小屋の煙突から出る煙とそれにおいては、夕方の始まりの象徴でもあった。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める